

北海道医歌人会詠草

ニシキギ

札幌 浜島 泉

トキ色を含む色づき ニシキギが朝冷えを呼び葉に霜やどす
気がかりのことなど多き時期なりし 歌詠むこころ細りてをりし
植ゑ替への鉢に水遣る頃ほひに 通り雨来て仕事を仕舞ふ
日が沈み迫る夕闇 残照のいとも乏しき山あひの村
主治医今朝夢枕に降り立ちしとぞ 平素練り言のみを宣る人

後期高齢

釧路 児玉 昌彦

長生きの代償に払う孤立感、兄弟見送り友を見送り
「人生がこんなものだど知ってたら・・・」最期に友の遺せし言葉
「金あれど何したら良いか分からぬ」と暮切れ迫る同級会で
一日に二度までのボカ落ちこむ日、抗うすべなき加齢の重み
棘のある老妻の言葉にいらだちてフト反省の自らの言

ウクライナ侵攻 (3)

北広島 古屋雅三知

戦争は同じ顔して来たりけり ヒットラーの嘘 プーチンの罫
クリミアもドンバス地方も我が国と歪めるプーチン史観の悪業
3日だけ たった3日で済むというプロパガンダに騙されし国民
兵去りて 瓦礫と遺体の山残る 残虐行為の侵略の足跡
心あるロシアの人民は国離れ祖国失くすもまた悲劇なり

海澄む

函館 水関 清

停まる度 名を読み上げる駅名標 子らにうれしい平仮名表記
柔らかくクワツサンをつまむ指 背後に流れる 遮断機の赤
あこがれは寝台特急・北斗星 噴火湾見て 朝のコーヒー
花時計 針の上には蝸牛 一時間なる回帰の旅路
君降りし あとの座席に溜まりたる 陽射し零さず列車は走る

七夕

士別 竹内 幹夫

幼き手跡国は違えど横書きの 短冊に躍る МИРの文字よ
戦禍の夜幾千万の織姫が 彦星偲び悲しんである
車止め灯を切りて宙仰ぎ 光の化石のさざめきを聴く
既読なし七夕の雨つゆ止まず 見る人も無く短冊ゆれる
飛び込みて息を堪えて泳ぐ時 牽牛の心微かに兆す

ないものねだり

滝川 村田 英俊

落葉なく我が家に飛び来し寒がりの トンボならんか しばらく居れり
三日間回送列車を見送りにて 鉄道オタクの カラスなのかも
「ま、いいね」と褒められた気で、いたけれど、ダメ出しだった津軽の初日
雪すきぶ青森酸ケ湯に あるはずの 混浴風呂は 男ばかりで
左足出し右足を出し歩く リハビリ辛し 飛べたらいいな

夏空

江別 三宅 浩次

雷鳴を遠くに聞きつつ夏空の積乱雲の立ち上がる見ゆ
新型のコロナに怯え閉じこもる窓から見える青空仰ぐ
今日もまた新規患者が何千と報道を読む数の冷たさ
一人の死は悲劇であるが方の死はただの数字という人のあり
木漏れ日のさわやかにして白樺の並木道行く今日は無事の日